

# ディグナーガの刹那滅論

石 田 尚 敬

## 0. はじめに

インド仏教の歴史において、ウィーン大学のフラウワルナー教授（Erich Frauwallner, 1898–1974）により「仏教認識論・論理学派」（以下「仏教論理学派」）と称された一連の思想家たちは、他学派と盛んに議論を交わしつつ、緻密な論証を用いて哲学的諸問題に取り組んだことが知られ、同派の登場以降、中観、唯識といった伝統的な大乘仏教思想を論じた歴史上の思想家はもちろん、ヒンドゥー教の諸派及びジャイナ教といった当時の他宗教の思想家でさえ、同派の緻密な論述形式に従って、より実証的な議論を展開することとなった。

仏教論理学派は、5世紀頃に活躍したディグナーガ（Dignāga 陳那, 480年–540年頃）によって創始されたことが知られ、その主著『集量論』（*Pramāṇasamuccaya*）は、知覚や推理といった哲学的問題を扱う全6章から構成されている<sup>1)</sup>。同著は、ディグナーガのそれまでの著作を集大成したものとして知られ<sup>2)</sup>、「認識手段」（*pramāṇa*）というキーワードのもとに、当時扱われた多様な哲学的主題が、体系的に論じられている。ただし、同著は、認識の対象となる「存在」についての議論には巧妙に立ち入らず、議論を進めていることが知られる<sup>3)</sup>。〈もの〉を直接的に認識するのは知覚とされ、知覚の対象は〈もの〉の「個別相」（*svalakṣaṇa*）と定義されるが、〈もの〉自体がいかんして存在するのかは、同著では明らかにされることがない。このことは、桂紹隆教授などが指摘する通り<sup>4)</sup>、ディグナーガが、当時の思想界において、普遍的な論理学の体系を打ち出そうとしていたことと無関係ではないようである。

本稿では、ディグナーガが、仏教思想の中でも注目される議論である「刹那滅論」を論じていた形跡を取り上げ、その思想史的位置づけを考察しようとするものである。ゴータマ・ブッダに始まる仏教の伝統において、その教えの核心を示す三法印（四法印）にも、「諸行無常」といわれ、「行」（*saṃskāra*）という諸々の形成された存在は、時間とともに移ろいゆく、無常なものであるとされている<sup>5)</sup>。そのような「諸行無常」の教えに対し、後代の仏教徒はさまざまな解釈を与えており、その一つの論理的帰結が、「刹那滅論」である。「刹那」とは仏教徒の定義する「瞬間」を指し、〈もの〉は一瞬一瞬の時間の経過において、常に消滅を繰り返しているという分析である。私たち人間の身体がいつかは滅び、形あるものがいつか壊れてしまうといったことは、私たちの一般的な感覚としても受け入れられているが、そのような存在するものが、実は一瞬一瞬のうちに生じては滅しているという考察は、実感できないものであるに違いない。しかしながら、仏教の伝統において、「アビダルマ」（阿毘達磨）という、さまざまなグループ（部派）で仏教思想の体系化が図られた教理研究の歴史、さらには、ディグナーガもその系譜に属する、唯識思想を展開した大乘仏教の瑜伽行派の議論においても、刹那滅論が詳しく論じられてきたことは、注目に値する<sup>6)</sup>。

ところで、仏教論理学を創始したディグナーガが、刹那滅論を論じている形跡は、長らく知られてこなかった。ディグナーガに先立つアビダルマや瑜伽行派の議論は既に多くの研究があり<sup>7)</sup>、ディグナー

ガの研究を受け継ぎ、仏教論理学を大成したとされるダルマキールティ (Dharmakīrti 法称, 7世紀頃) の利那滅論もまた、ウィーン大学のシュタインケルナー教授 (Ernst Steinkellner) をはじめとする多くの研究者が、精力的に研究を継続してきた<sup>8)</sup>。しかしながら、ディグナーガの利那滅論については、主著『集量論』が存在論に深く立ち入らないことも相俟って、詳細な議論が展開された形跡がない。あるいは、ダルマキールティの利那滅論が大きく深化したものであったため、ディグナーガの議論が時代の中で失われたことも考えられる。しかしながら、ディグナーガの議論は、アサンガ (Asaṅga 無著, 4-5世紀頃)、ヴァスバンドウ (Vasubandhu 世親, 5世紀頃) といった瑜伽行唯識派の利那滅論と、ダルマキールティの議論を橋渡しするものとして、やはり看過できないものには違いない。本稿では、そのような問題関心から、ディグナーガが利那滅を説いた痕跡を複数の資料から考察する。

## 1. ディグナーガの『俱舍論要義灯』

ディグナーガは、その研究の初期段階において、先行するさまざまな思想家のテキストを研究し、その要約を作成し、または一部を改変することによって、著作として残している。そのようなテキストには、仏教徒以外の著作も含まれ、文法学派のパルトリハリ (5世紀頃) の著作の一部を、自らの『三時の考察』としてまとめていることは、よく知られている<sup>9)</sup>。

そのようなテキストのひとつに、『俱舍論要義灯』(\**Marmapradīpa*, 以下『要義灯』) が知られる。ディグナーガは、瑜伽行派の論師として知られるヴァスバンドウから大きな影響を受けているが、ヴァスバンドウがアビダルマの伝統で残した『阿毘達磨俱舍論』(*Abhidharmakośa*, 以下『俱舍論』) および自注 (*bhāṣya*) の要約を残している<sup>10)</sup>。

『要義灯』は、全体を通してほぼ『俱舍論』及び自注の要約からなることで知られ、ディグナーガ独自の考察が反映されているとは、決して見做すことはできない。しかしながら、ディグナーガが、先輩であるヴァスバンドウの議論を踏まえている証左とはなろう。本稿ではまず、『要義灯』に見られる利那滅論を確認したい。

ヴァスバンドウは、『俱舍論』において、「滅無因説」に基づく利那滅論 (瞬間的存在論証) を行っていることが知られる。世親は、『俱舍論』において、以下のように述べている<sup>11)</sup>。

「というのも、結果には、原因が存在する。しかし、「消滅」は、非存在 (*abhāva*) である。それ (非存在である消滅) 対して、何がなされ得るだろうか。」

*kāryasya hi kāraṇaṃ bhavati. vanāśaś cābhāvaḥ. yaś cābhāvaḥ, tasya kiṃ kartavyam.* (AKBh 193, 7-8)

仏教思想の理解では、「無為法」と呼ばれる存在カテゴリーに分類されている、「空間」を意味する「虚空」(*ākāśa*) などの例外を除き、「有為法」と呼ばれる存在は、すべて、原因によって形成されたものとされる。ここでは、そういった諸々の存在 (有為法) の「消滅」を「非存在」として捉え、「非存在は、何かによって作られるものではない」という理由から、「非存在である〈もの〉の消滅は、原因を持たない」とされるのである。

以下では、ディグナーガの『要義灯』による『俱舍論』の要約とともに、議論を追うこととしたい。『要義灯』は以下のように纏めている (テキストの太字は『俱舍論』の詩頌を指す。以下同じ)。

「[すべての作られたもの (有為法) は] 刹那的 (瞬間的) 存在として理解される。なぜなら、作られたものは必ず滅するから。[というのも、] 諸存在の消滅は、原因なくして起こるものである。もしそれ (消滅) が生じた直後のものになれば、後にも [そのような消滅は] 起こらないことになろう。しかし、それ (諸存在の消滅) は [実際に] 経験されている。」

*skad cig mar 'śes par bya ste* | <sup>a</sup> 'dus byas ni gdon mi za bar **'jig phyir ro** | <sup>b</sup> dños po rnam *'jig pa ni rgyu med pa las 'byuñ ba yin no* | <sup>b</sup> <sup>c</sup> de<sup>1</sup> yañ gal te skyes pa tsam la ma yin na phyis kyañ mi 'byuñ bar 'gyur ro<sup>c</sup> || de

yañ mthoñ ño ||<sup>2</sup> (MP<sub>t</sub> D143b2–3, P201b5–6)

<sup>a</sup> Ce' AKBh 193, 5–6 (with AK 4.2d'): saṃskṛtasyāvaśyaṃ vyayāt. <sup>b</sup> Ce' AKBh 193, 7: ākasmiko hi bhāvānām vināśaḥ. <sup>c</sup> Ce'e AKBh 193, 8–9: so śāv ākasmiko vināśo yadi bhāvasyotpannamātrasya na syāt, paścād api na syāt...

<sup>1</sup> de D : om. P <sup>2</sup> mthoñ ño || em. : mthoñ ste D P

ここでは、前述の通り、〈もの〉の消滅が原因を持たないことが論じられ、さらに、そのような、原因を持たない「消滅」が、何時、どのように成立するかを考察した上で、「生じた直後に消滅が起こらなければ存在物の時間的展開は説明できない」という論理が展開されるのである。このような議論から結論付けられるのが、「〈もの〉の存在は、刹那（瞬間）的である」という議論であった。

この議論においては、岩田（2008: 13, 9）が示すように、以下のような論理的関係が認められる。

有為法の滅、即ち、非有 (abhāva) — 非結果 (akārya) — 原因なし、即ち、不待他因

以上の議論に続けて、いくつかの反論が想定され、説明がなされる。私たちの自然な発想として、「〈もの〉の消滅は、何らかの原因によってもたらされるのではないか」という疑問は、当然ながら考えられる。〈もの〉が壊れるのは、ハンマーで叩いたり、火で焼かれたりするなど、外在的な要因によるのではないか、というものである。それに對し、『要義灯』は、以下のような議論を『俱舍論』に基づき提示している。

「もし、『消滅は原因を持つ』[という]ならば、[それに反して] 認識や音声や焰の消滅は原因を持たないことが経験されている。したがって、これ（消滅）は原因に依存しない。また、〈色かたち〉などは、火と結びつくことによって消滅すると認める人たちに対しても、次のように答えられる。『[認識や音声や焰などを含め、] いかなるものにも、原因なしに [消滅するということが] なくなってしまう』と。」

<sup>a</sup> gal te 'jig pa rgyu dan ldan pa 'zig tu gyur na<sup>a</sup> | <sup>b</sup> blo dan<sup>1</sup> sgra dan me lce dag 'jig pa rgyu med<sup>2</sup> pa las 'byuñ ba yañ mthoñ bas 'di rgyu la ltos pa ma yin no<sup>b</sup> || yañ gañ 'zig gzugs la sogs pa me dan 'brel pas 'jig par 'dod pa de dag gi lan yañ 'di yin te | <sup>c</sup> rgyu med pa las 'ga' mi 'byuñ<sup>c</sup> || (MP<sub>t</sub> D143b3–4, P201b6–7)

<sup>a</sup> Ce' AKBh 193, 17: yadi vināśo hetumān syāt [hetumān syāt em. (rgyu dan ldan pa 'zig tu gyur na AKBh<sub>t</sub> D167a2, P191a7): hetusāmānyāt AKBh]. <sup>b</sup> Ce'e AKBh 193, 17–18: kṣaṇikānām ca buddhiśabdārciṣāṃ dṛṣṭa ākasmiko vināśa iti nāyaṃ hetum apekṣate

<sup>c</sup> Ce' AK 4.3a: na kasyacid ahetoḥ syāt.

<sup>1</sup> dan D : ran P <sup>2</sup> rgyu med em. (AKBh<sub>t</sub> D167a2, P191a8) : med D P

『俱舍論』が属するアビダルマ（阿毘達磨）の教理研究の伝統における見解では、私たちの認識や音声、焰といった存在物は、原因を持たずに消滅するものであると考えられていた。ここでの議論では、認識や音声、焰といった瞬間的な存在の例を、〈色かたち〉という物質一般に拡大して適用していることが伺える。このようにして、すべての〈形成されたもの〉（有為法）を瞬間的存在であると論じる、刹那滅論が展開していく。

次に、これまでの考察の付論として、消滅が原因を持たないということを認めないならば、〈もの〉を生み出す原因が、同時に、〈もの〉を消滅させる原因にもならなければならないという議論が展開される。再び、『要義灯』の議論を参照しよう。

「さらにまた、[〈もの〉を生み出す] 原因が [同時にそれらを] 滅するものとなろう。火との結合から、燃焼がもたらす [属性] が生じるが、まさにその同じ [火との結合] から、あるいはそれと同種の [火との結合] から、より燃えた、[あるいは] 最も燃えた状態が生じる場合、それら（燃焼がもたらした属性）は滅する。したがって、[属性を生み出す] それらの原因が、[それらの属性を] 滅するものとなるか、[属性を生み出す原因と滅ぼす原因が] 区別のないこととなろう。しか

しそれは正しくない。」

g'zan yañ | <sup>a</sup>rgyu yañ 'jig pa por 'gyur ro<sup>a</sup> || <sup>b</sup>me dan 'brel pa gañ las tshos byed las skye ba 'byuñ ba de ñid dam de<sup>1</sup> dan 'dra ba las<sup>2</sup> tshos pa dan | ches tshos pa dan | ches cher tshos pa byuñ na de dag 'jig pas rgyu de dag gi 'jig pa por 'gyur ba 'am | yañ na bye brag med par 'gyur ro<sup>b</sup> || de yañ rigs pa ma yin te | (MP, D143b4-5, P201b7-8)

<sup>a</sup> Ce' AK 4.3b: *hetuḥ syāc ca vināśakāḥ*. <sup>b</sup> Ce'e AKBh 194, 4-6: *yasmād* [em. (*gañ las* AKBh, D167a7, P191b6): *ghāsādy*<sup>o</sup> AKBh 195, 4] *agnisambandhād* [<sup>o</sup>sambandhād em. (*brel pa ... las* AKBh, D167a7, P191b6): <sup>o</sup>sambandhā AKBh 195, 4] *gunāḥ pākajā utpannāḥ, tata eva tādṛśād vā punaḥ pakvataratamotpattau teṣāṃ vināśa iti hetur eva teṣāṃ vināśakāḥ syāt, hetvaviśiṣṭo vā*.

<sup>1</sup> de ñid dam de em. (AKBh, D167a7, P191b6): *de ñid de D; de P* <sup>2</sup> ba las em. (AKBh, D167a7, P191b6): *bar D P*

ここでの議論では、〈もの〉を生み出す原因と、〈もの〉を消滅させる原因が同じということはあるかないことが述べられている。〈もの〉の消滅は非存在であり、それは原因を持たないというのが、『俱舎論』やその要約としての『要義灯』の見解であった。

なお、岩田 (2008) も指摘するように、『俱舎論』の説明は、ヴァスバンドゥによって5世紀に著されたものであり、時代的に先行する瑜伽行派の諸典籍において説かれる利那滅論に比較して、より整理された議論を提示しているとされる。『要義灯』は、『俱舎論』の利那滅論を要約し、この後の仏教論理学の利那滅論へと展開する橋渡しの役割と果たしたという点において、看過できない重要性を有している。

## 2. ディグナーガの利那滅論

前節において、ディグナーガがヴァスバンドゥの『俱舎論』の要約を通して、利那滅論を論じていることを見てきた。『要義灯』の議論は、ディグナーガが、『俱舎論』に見られるヴァスバンドゥの議論を受け継ぎ、その後に展開する仏教論理学の議論の中に、なんらかの形で受け継がれていったと考えるにおいては、興味深い資料となる。しかしながら、『要義灯』の議論は、あくまでも『俱舎論』の要約であり、決してディグナーガ独自の議論と評価することはできない。

本節では、ディグナーガ自身による説明として、利那滅論が説かれていることを伺わせる、別のテキスト (断片) を考察してみたい。筆者はかつて、ディグナーガが利那滅論を説いていることを窺わせるテキストの引用を発見し、紹介したことがある<sup>12)</sup>。本稿でも、そのテキストを取り上げつつ、ディグナーガの利那滅論を考察してみたい。

まずは、ディグナーガの引用断片がどのように発見されたか、振り返っておこう。ディグナーガのテキストが引用されるのは、後述のように、8世紀に活躍したダルモットラの注釈書においてである。しかし、ダルモットラがどうしてディグナーガに言及したかは、注釈の対象となっているダルマキールティの議論を参照しなければならない。最初に、ダルマキールティのテキストを参照しよう。

ダルマキールティは、『知識論決択』(*Pramāṇavinīścaya*) 第2章の後半部において、利那滅論の付論 (*śeṣa*) とされる議論を展開するが、そこにおいてまず、〈もの〉の「区別」(*bheda*) を問題にしている<sup>13)</sup>。そこでは、或る属性 (*dharma*) が、別のもの (*arthāntara*) を原因としているなら、それはそれが属する基体 (*dharmin*) とは全く別の存在となり、基体・属性間の必然的な関係が全く成立しなくなると論じられる。ここでは、同書の文脈から、基体として「生地・布」(*vāsa*) と、それに後から付着することになる「染料」(*rāga*) が念頭に置かれていると見てもよい。

「というのも、[ある] 属性 (*dharma*) が別のものを原因としているなら、それ (属性) は [それが属する基体 (*dharmin*) とは] 全く別なものとなるだろうから。』

*arthāntaranimitto hi dharmāḥ syād anyaiḥ saḥ* / (PV 1.33ab)

この議論に引き続き、一般的定義として、諸々の〈もの〉(*bhāva*) の「区別」(*bheda*) と〈もの〉の「区別の原因」(*bhedahetu*) について解説される。その説明をここで確認しておこう。



「なぜなら、次のものが、諸存在の差異または〔諸存在の〕差異の原因だからである。すなわち、矛盾した属性の存立と原因の差異である。」

*ayaṃ hi bhedo bhedahetur vā bhāvānāṃ yad uta viruddhadharmādhyaśaḥ kāraṇabhedaś ca.* (PVin 2 89, 14–90, 1)

ここでは、基体や属性に限定することなく、一般論として、〈もの〉の区別 (*bheda*) とは「矛盾した属性との結合」(*viruddhadharmādhyaśa*) であり、〈もの〉の区別の原因 (*bhedahetu*) は、その〔生じる〕「原因の相違」(*kāraṇabheda*) にあることが述べられている。

以上の言明は、ダルマキールティの定義としてしばしば引用され、研究者にも言及されているが<sup>14)</sup>、ここで上記の定義が提示される目的のひとつに、仏教思想の定説として重要な「瞬間的存在（刹那滅）論証」が念頭に置かれていることは、看過されてはならないと思われる。

ここで、ダルマキールティは、「無常性」(*anityatā*) という属性 (*dharma*) を持ち出し、議論を進めている。「無常性」は、一見、否定的な性質を表すものであることから、存在としての〈もの〉(*bhāva*) とは矛盾する (*viruddha*) ようにも見える。さらには、ニヤーヤ・ヴァイシェシカなどのインド正統哲学諸派の理解では、「無常性」(*anityatā*) とは、〈もの〉が壊れる場合に、ハンマーなどの外在的要因によって後から付加されるものと捉えられるものでもある。ここでは、上記の2点は直接問題とはされないものの、ダルマキールティは以下のような反論を想定する。

「【反論】[もし、無常性という属性が、基体である〈もの〉と] 別のものを原因としていなくとも、[〈もの〉が] 生じる時点で、無常性は成立していないので、それ（＝基体となるもの）を本質としていない（＝それと一体でないこと）は変わらない。」

*nanv anarthāntarahetutve 'pi bhāvakāle 'nityatāniṣpattes tulyātatsvabhāvatā.* (PVSV 21, 2–3)

この反論は、實在論的な立場を取る対論者が、基体 (*dharmin*) が成立する時点と、それに付属する属性 (*dharma*) の成立が、一瞬（1刹那）という短い間とはいえ、時間を異にすると考えることに由来している。これに答えるものとして、ダルマキールティは、「無常性」がいかにして成り立つか、以下のように説明する。

「無常性 (*anityatā*) といわれるものは、いかなるものも、〔存在の〕後に成立するような、〔存在とは〕別のものでは決してない。というのも、一瞬（刹那）の間だけ留まるという属性を持つ、まさにその存在が無常性であると、既に多く説かれたから。」

*na vai kācid anityatā nāmānyā yā paścān niṣpadyate. sa eva hi bhāvaḥ kṣaṇasthidharmā'nityatety uktaprāyam.* (PVin 2 90, 6–7)

ここで述べられるように、ダルマキールティは、實在において、〈もの〉(*bhāva*) とその属性である「無常性」を存在論的に区別していないことが分かる。この理解に立った上で、「〈もの〉は無常性である」(*bhāvo 'nityatā*) という表現さえ、可能になるのである。このような基体・属性の理解は、基体である〈もの〉と一体（同一性）の関係にある無常性という属性に限らず、同一性（それを本質とする関係 *tādātmya*) の関係にあるすべての基体・属性に適用できるものであろう。

次に、ダルマキールティは、〈もの〉においてもそのそれ自体と無常性が同一のものとして成り立っている場合に、どうして一般的な人間が無常性を理解できないのかという点を取り上げている。

「鈍感な人は、その〔存在の、無常性という〕本質を、[たとえ] 見たとしても確定しない。[その者は、存在の] 存在性を認識することにより、[「その存在は」常にそうある] という疑いに欺かれるから。あるいは、別の類似したものが生じることによって欺かれるから。[というのは、存在物の連続（相続）] の最後の瞬間を見る者は、[無常性を] 確定する [ことができる] からである。」

*tam asya svabhāvaṃ mandabuddhiḥ paśyann api na vyavasyati sattopalambhena sarvadātadbhāvaśaṅkāvipr*

*alabdhaḥ sadṛśāparotpattivipralabdho vā, antyakṣaṇadarśināṃ niścayāt.* (PVin 2 90, 9–11)

さて、上記の、ダルマキールティの『知識論決択』の説明に対するダルモーツラの注釈書『知識論決択詳注』において、ディグナーガのテキスト断片が引用されている。ダルマキールティは、一般的な人が〈もの〉を認識してもその無常性を理解できない理由として、①「〈もの〉の存在性を認識することにより、[その存在は] 常にそうある」という疑いに欺かれる」という認識側の内在的な理由と、②〈もの〉の刹那的存在様態において、別の類似したものが生じることによって欺かれるという、外在的な理由の二つの原因を挙げている<sup>15)</sup>。ダルモーツラは、ダルマキールティの述べた「外在的な理由」をディグナーガも既に説いていた典拠として、以下のように論じる。

「一方、外的な要因だけを示しつつ、師ディグナーガによって、

『まさにそれ（最初の瞬間的存在）がそれ（消滅）を本質とするから、[それ以外には] いかなる時にも[消滅は] 妥当しない。』

と述べられた。」

*bāhyam eva tu nimittaṃ darśayatācāryadignāgena*

*sadṛśenāvaruddhatvāt tadgrahād dhi tadagrahaḥ ||*

*ity uktam.* (PVinT 2 Ms 114a7–b1)<sup>16)</sup>

ここにおいて、師ディグナーガという名の言及とともに、テキストが引用される。なお、ダルモーツラの注釈書のチベット語訳は、チベット語によって『知識論決択』への注釈書を著したプトン・リンチェンドゥブ (*Bu ston rin chen drup*, 14世紀) によっても利用されており、そこにもチベット語訳の形で、ディグナーガの名称とともにテキストが引用されており、ディグナーガのテキスト断片であることは追認されていることを付記しておく<sup>17)</sup>。

以上のように、ディグナーガの名とともにテキストが引用されていることは重要であるものの、シュローカ調のサンスクリット語の詩節の2分の1が引用されているのみで、これだけの引用テキストでは、ディグナーガの意図した議論の内容や、テキスト中の代名詞が何を指すのかも明らかではない。そこで、仏教内外のテキストを調査すると、ジャイナ教徒の思想家であるハリバドラ・スーリ（7世紀頃）の著作『シャーストラ・ヴェールター・サムツチャヤ』（学説情報集成）に、より詳細な情報を見出すことができる。ハリバドラのテキストを、参照しよう。

「そしてまた、[相続の] 最後 [の瞬間（刹那）] において消滅を見ることが、最初の瞬間的（刹那）存在の消滅を証明する。まさにそれ（最初の瞬間的存在）がそれ（消滅）を本質とするから、[それ以外には] いかなる時にも[消滅は] 妥当しない。」最初の[存在]が消滅を本質としているなら、最後のそれ（存在）にどうして[消滅が] 知覚されるのか。[相続において] 等しいものが次々と生じることにより、欺かれるからである。以下のように言われている。」

*ante kṣayekṣaṇaṃ cādyakṣaṇakṣayaprasādhanam /*

*tasyaiva tatsvabhāvatvād yuyjate na kadācana //ŚVS 6.38, 451//*

*ādaḥ kṣayasvabhāve ca<sup>1</sup> tatrānte darśanaṃ katham /*

*tulyāparāparotpattivipralambhād yathoditam //ŚVS 6.39, 452//*

<sup>1</sup> *svabhāve ca ŚVS<sub>1</sub> ŚVS<sub>2</sub> ŚVS<sub>3</sub>* (cf. *Dikpradā* 63b, 11) : *svabhāvatve ŚVS<sub>4</sub>*

ここでは、仏教との見解として、刹那滅論証が紹介される。〈もの〉が継続的に存在している場合、〈もの〉が壊れる瞬間を実際に目にするので、〈もの〉が生じた最初の瞬間に実は滅していることを推論できるという、刹那滅論証が述べられている。そして、後半（ŚVS 6.39）では、一般的な人が、なぜ最初の瞬間（刹那）に消滅を知覚できないのかということが述べられ、それは、〈もの〉が連続して生じている間、類似した〈もの〉が次々に生じることにより、人が騙されてしまうからだとされている。

そして何より、詩節の最後（ŚVS 6.39）で、「以下のように言われている」（*yathoditam*）というように、引用であることを明記しつつテキストが言及されている。続くテキストを参照しよう。

「[相続の] 最後 [の瞬間（刹那）] に消滅を見ることにより、最初の [瞬間における]、見られなかった消滅が推理される。なぜなら（*hi*）, [相続上、連続して生じる] 類似したものに覆い隠され、それ（類似したもの）を把握することにより、それ [最初の瞬間の消滅] が把握されないから。」

*ante kṣayekṣaṇād ādau kṣayo 'dr̥ṣṭo 'numīyate /*

*sadṛśenāvaruddhatvāt tadgrahād dhi tadagrahaḥ //ŚVS 6.40, 453//*

ここで、ハリバドラーが、その自注とされるテキストも含めてディグナーガの名には言及しないものの<sup>18)</sup>、明らかに引用として扱っていることから、以上の詩節は、ダルモッタラのディグナーガへの言及と合わせ、ディグナーガのものと見做してよいと考えられよう。

そこでは、「相続」（*santāna*）と呼ばれる、〈もの〉が連続して生じる一連の過程の最終段階において、〈もの〉が滅することを実際に観察することで、実は〈もの〉が生じた最初の刹那（瞬間）に滅していたことが推理できるという、刹那滅論証が述べられているのである<sup>19)</sup>。

### 3. おわりに

以上の議論から、ディグナーガもまた、仏教思想の伝統の中で論じられた刹那滅の議論に関与していたことを、示すことができたかと考える。

ディグナーガは、後に仏教論理学を大成することとなるダルマキールティが論じたとされる、消滅に基づく刹那滅論証と存在性に基づく刹那滅論証という二種の論証のうち<sup>20)</sup>、伝統的な消滅に基づく刹那滅論証を論じていたと、見做すことができる。このことは、思想史上も不自然なものではない。

ディグナーガの議論は、より詳細かつ洗練されたダルマキールティの刹那滅論証の登場とともに、存在意義が薄れ、おそらくはそれが論じられたテキストの伝承も、途絶えたものと推測される。しかしながら、『俱舍論』を始めとするアビダルマの伝統や瑜伽行派などにおいて論じられた刹那滅の議論は、ディグナーガによって仏教論理学派にも取り入れられ、仏教の論理学のダルマキールティへの受け継がれたと考えられる。ここに、思想史上の空白をわずかながらも埋めることができたのではないかと思います。

#### 注

1) Cf. Hattori 1968: 12–13.

2) ディグナーガの著作とその思索の発展については、Frauwallner 1959を参照。

3) 桂 1984: 106–108 参照。

4) 桂 (2004: 15) は、ディグナーガが、インド哲学のすべての学派に採用されることが可能な「開かれた論理学」を構築しようとしたと指摘する。

5) 岩田 2008: 4 参照。

6) 私たちの日常経験において、〈もの〉が壊れるのは、硬いものにぶつかるなどの外在的要因によることが多い。しかしながら、ここでいう「刹那滅」とは、一見、〈もの〉が存続しているように見えながら、論理的分析を加えた場合、一瞬一瞬において生成と消滅を繰り返していなければ〈もの〉の存在を説明できないとする、論理的議論の帰結として論じられたものである。なお、私たちが経験する、人の死や〈もの〉の損壊を「粗大な消滅」（*sthūlavināśa*）とし、論理的な分析を加えたうえでの刹那滅（瞬間的存在）を、「微細な消滅」（*sūkṣmavināśa*）として区別する場合もある。Cf. NM 540.15; 544.16.

7) 代表的なものとして Rospatt 1995が挙げられる。

8) Steinkellner 1969参照。

9) 服部 1961参照。

- 10) 櫻部 1956 参照。
- 11) 桂 2002: 262, 21–25 参照。
- 12) Cf. Ishida 2009.
- 13) 同様の議論は、ダルマキールティの初期の著作である『知識論評釈』にもみられる。ただし、本稿では、ディグナーガのテキストを引用するダルモツタラの注釈書の対象となった、『知識論決択』の議論を取り上げる。PV 1.33ab 及び同箇所に対する PVSV 参照。
- 14) Kyuma 1998 及び江崎 2005 参照。
- 15) PVin 2 90, 9–11.
- 16) チベット語訳テキストは、以下の通り。Cf. PVinT<sub>i</sub> D267a5–6, P321b5–6: *slob dpon phyogs kyi glaṅ pos phyi rol gyi rgyu mshan ṅid ston par mdzad pa* (D : om. P) *na | 'dra ba* (D : 'bra ma P) *yis ni bsgribs pa'i* (P : sgrib pa'i D) *phyir || de* (D : da P) *bzuṅ pas na de mi 'dzin || ṅes* (D : ces P) *bśad do ||*
- 17) Cf. PVinT<sub>B</sub> 146b1: *slob dpon phyogs glaṅ gyis 'dra ba yis ni bsgribs pa'i phyir || des bzuṅ bas na de mi 'dzin || ṅes so ||*
- 18) Cf. Dikpradā 63b, 9–64a3: *anta ityādi. ante kṣayekṣaṇaṃ cānte nāśadarśanaṃ ca. kim ity āha – ādyakṣaṇakṣayaprasādhanaṃ. ādyasya kṣaṇasya nāśasādhanaṃ. yat prārabdham, tasyaiva vastunaḥ tatsvabhāvatvād nāśasvabhāvatvāt. yujyate na kadācana, atatsvabhāvatvāpatter iti ||451|| etad eva samarthayann āha – ādāv ityādi. ādau prathakṣana eva kṣayasvabhāve ca nāśasvabhāve ca tatra vastuny ante darśanaṃ kathaṃ kṣayasya. kim nādāv eveti bhāvaḥ. parābhiprāyam āha – tulyāparāparotpattivipralambhād ante nādāv eveti. yathoditaṃ pūrvasūribhiḥ ||452|| kim uditam ity āha – anta ityādi. ante kṣayekṣaṇād ante nāśadarśanād ādāv utpattikāle kṣayo nāśo 'drṣṭaḥ sann anumīyate, anaśvāsyānte 'pi tadayogāt. agraḥakāraṇaṃ āha – sadṛśenāvaruddhatvāt tatsadṛśasyaivotpatteḥ tadgrahād {vi} sadṛśagrahād eva tadagraha ādyakṣayāgraha ity arthaḥ ||453||*
- 19) Cf. von Rospatt 1995: 68ff.
- 20) Steinkellner 1969 及び岩田 2008: 22, 注50) 参照。

#### Sigla for minor witnesses

- Ce** *citatum ex alio* / citation from another (text) marked as such by the author.
- Ce'** *citatum ex alio usus secundarii* / citation from another (text) being used secondarily; that is, a Ce (citation in another) passage not marked as citation by the author.
- Ce'e** *citatum ex alio usus secundarii modo edendi* / citation from another (text) being used secondarily with redactional changes.

#### 一次文献

- AK** Abhidharmakośa (Vasubandhu): see AKBh.
- AKBh** Abhidharmakośabhāṣya (Vasubandhu): Ed. P. Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute 1967 (Tibetan Sanskrit Works Series VIII).
- AKBh<sub>t</sub>** Tibetan translation of Abhidharmakośabhāṣya (Vasubandhu), D No. 4090; P No. 5591.
- Dikpradā** Dikpradā (Haribhadra?): see ŚVS.
- NM** Nyāyamañjarī (Jayanta): Ed. K. S. Varadacharya, *Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa with Ṭippaṇī – Nyāyasaurabha by the Editor*: vol. 1. [Oriental Research Institute Series 116]. Mysore 1969.
- PV 1** Pramāṇavārttika (Dharmakīrti), chapter 1 (*svārthānumāna*): see PVSV.
- PVin 1** Pramāṇaviniścaya (Dharmakīrti), chapters 1 and 2: *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya. Chapters 1 and 2*. Ed. E. Steinkellner. Beijing – Vienna 2007.
- PVinT<sub>2</sub>** Pramāṇaviniścayaṭīkā (Dharmottara), chapters 2: Copy of Sanskrit Manuscripts in the library of the CTRC (Box 109/1).
- PVinT<sub>B</sub>** Tshad ma rnam par ṅes pa'i ṭīk, Tshig don rab gsal (Bu ston Rin chen grub): *The Collected Works of Bu-ston*. Ed. Lokesh Chandra. [28 Bde] New Delhi 1965–1971: Bd 24 (Ya), Nr. 2, 1–301a4.
- PVinT<sub>i</sub> 1** Tibetan translation of Pramāṇaviniścayaṭīkā (Dharmottara), chapters 1: D No.4229; P No. 5727.
- PVSV** Pramāṇavārttikasvavṛtti (Dharmakīrti): Ed. Raniero Gnoli, *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocomentary. Text and critical notes*. Roma 1960.



- MP<sub>1</sub> Tibetan translation of Marmapradīpa (Dignāga): D No. 4095; P No. 5596.  
 ŚVS Śāstravārttāsamuccaya (Haribhadra): Śāstravārttāsamuccaya by Śrī Haribhadra Sūri with his own commentary named Dikpradā, Bombay: Godiji Jain Upashraya 1929.

## 二次文献

- Frauwallner 1959 Erich Frauwallner, Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 3 (1959) 83–164.  
 Hattori 1968 Masaaki Hattori, *Dignāga on Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamuccaya from the Sanskrit fragments and the Tibetan versions*. Harvard Oriental Series 47. Cambridge, MA: Harvard University Press 1968.  
 Ishida 2009 Hisataka Ishida, “A Newly Discovered Dignaga Fragment in Sanskrit” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 57(3), 1241–1245.  
 Kyuma 1999 Taiken Kyuma, “bheda and virodha” *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*, 225–232.  
 Rospatt 1995 von Rospatt, Alexander. *The Buddhist Doctrine of Momentariness. A Survey of the Origins and Early Phase of this Doctrine up to Vasubandhu*. Stuttgart 1995.  
 Steinkellner 1969 Ernst Steinkellner, “Die Entwicklung des Kṣāṇikatvānumānam bei Dharmakīrti. (Festschrift für Frauwallner, WZKSO Bd. 12–13, 1968/1969, 361–377).  
 江崎 2005 江崎公児「ダルマキールティによる差異の定義について」『比較論理学研究』2, 39–46.  
 桂 1984 桂紹隆「ディグナーガの認識論と論理学」『認識論と論理学』（講座・大乘仏教9）103–152.  
 桂 2002 桂紹隆「ヴァスバンドウの刹那滅論証」『櫻部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』, 259–276.  
 桂 2004 桂紹隆「インド仏教における論証の伝統」『広島大学大学院文学研究科 比較論理学プロジェクト研究センター 平成15（2003）年度研究成果報告書, 2–19.  
 桜部 1956 桜部建「陳那に帰せられた俱舍論の一綱要書」『東海佛教』2, 33–36.  
 服部 1961 服部正明「ディグナーガ及びその周辺の年代」『塚本博士頌寿記念 仏教史学論集』, 79–96.

〈令和3年度科学研究費補助金（若手研究・課題番号18K122037）による研究成果の一部〉